

明治大学異業種交流会 全国紫明クラブ会報

第11号 平成22年11月26日 発行/全国紫明クラブ 本部/東京都渋谷区西原3-2-5-2F

■ 創立 15 周年記念例会 講演 作詞家 作家 プロデューサー 阿木 燿子 様



5月25日 創立15周年記念例会において、阿木燿子さんの講演をいただきました。

前半は、女子中学女子高と女性ばかりの世界でご自身を持って余しておられて、自分を変えたいとの思いから、あえてパンカラの母校を選ばれたこと、入学の日の宇崎竜童氏との出会い。そして、宇崎氏から詩を書く環境をあたえてもらったこと。それがご自身の中に、少女、少年、老練な男性など、様々な人格が存在するということがつづくまでのお話を、はじめての作品の「港のヨーコ、横浜、横須賀」や、72曲の作品を提供した山口百恵さん、郷ひろみさんのエピソードを交えて伺いました。

後半は、本当に自分のやりたいことを行い、沢山ある可能性を広げることは誰もができることであり、さらには、そのために自分自身を成長させて磨くには、ということに言及されてゆきます。

まず最初に、自分の中に傷ついた子どもが、今も一人で泣いていることに気がつくこと。その子の傷を癒してあげることが、いつまでも車輪の中を走り続けるハツカネズミのように同じことに、同じ反応をしてしまうことからの脱却につながってゆく。そこから成長の次の段階へ進んでゆくことができるようになる。

そして、その子の傷をいやすことができるのは、あなたしかいない。

自分の中の傷ついてしまっている子ども（インナー・チャイルド）を愛してあげること、大変だったね、つらかったね、でももう大丈夫と慰めてあげること、抱きしめてあげること。0歳からもう一度、育て上げること。名前をつけることから始めて、ほめること。スキンシップをとる。「愛しているよ、おまえは私の誇りだ、ごめんね」と声をかけてあげる。あくをひとつずつ掬ってきれいにしてゆくように、というお話をいただきました。



「そしてそれと同じような言葉を、奥様、お子様にかけてください。今日、家にもどられた時から」という最後の一言をいただいて、講演は終了しました。

(5月25日 紫紺館に於いて)

全国紫明クラブホームページを開設しました
<http://shimei-club.jp/> にアクセスください。

■ 9月例会講演 「サッカー部復活劇～その舞台裏を語る」

神川 明彦 明治大学体育会サッカー部監督



神川 明彦 (かみかわ あきひこ)

- 明治大学体育会サッカー部監督
- 66年 神奈川県生まれ
- 84年 鎌倉高校在学時神奈川県代表として国体優勝
- 85年 明治大学政治経済学部経済学科入学
- 89年 政治経済学部卒業、明治大学事務職奉職
神奈川県成年二部代表として国体3位
- 94年 体育会サッカー部コーチ就任
- 04年 同ヘッドコーチ就任
- 05年 同監督就任

ご紹介いただきました、神川明彦ともうします。2004年より、明治大学体育会サッカー部の監督をさせていただいております。

明治大学には、1985年に政治経済学部経済学科に入学し、1989年3月26日に卒業しております。

現在も、サッカー部は関東リーグ戦を闘っておりまして、現在のところ、13試合、11勝、1敗、1引き分け、勝ち点36で、首位独走中です(2010年9月17日時点)。

ただ、残念なことに、昨年出場した天皇杯では格下の東京ヴェルディユースに敗れてしまいました。もっとも、このヴェルディユースもJFLを破り、東京代表になり、それなりに強いチームだったということが後で判ったような次第ですが。

私は、1966年7月に鎌倉で生まれております。神奈川県で教員をしていた父と、母と兄、妹の5人家族で暮らしておりました。

明治大学には、祖父の神川彦松が、東大を退官したのちに、明治大学で非常勤の教授という形で国際政治の教鞭をとったということで、浅からぬご縁を感じております。

学生時代に学んだこと

紆余曲折があり、明治大学に入学と同時にサッカー部に入部いたしました。

セレクションで入学したのですが、将来的には、教員になろうと思っていました。教員免許がとれば、いつだってサッカーに携わって生きて行けると思っていたからです。

リサーチ不足だったのですが、セレクションで呼ばれてサッカー部に入ってみて驚きました。合宿所で、タバコを吸う部員がほとんどだったのです。鎌倉高校時代は、タバコをすう部員なんかは当然いまして、タバコはサッカーにとって百害あって一利なし、と思っていたからです。合宿所の白く煙った食堂の光景をみて唖然としたのを今でも覚えています。

そして、必要以上の上下関係。トレーニング以外の雑務。そういったものがピッチ内にも及んでいました。監督が山口さんとおっしゃる方でしたが、実際の指導は塩沢コーチでした。この塩沢さんが、火水木金の四日の練習の内、水曜日しかいらっしやらない。当然、練習は学生が仕切るようになり、4年生が手厚く保護されるような状況が生まれていました。

練習には、来るけれど、熱の入っていない先輩。それでも4年生と言うだけで試合には出場できる。大変理不尽な環境で、努力が報われないことに悶々としておりました。

合宿所は八幡山にあり、新宿に出るのも、渋谷に行くのも大変便利な立地にあり、通常の学生生活を謳歌するには大変便利な場所にあるのですが、私はサッカーを生活の中心に置いておりましたので、一年生で雑務が終わったあと、夜の公園でこれららどうなるのだろうとぼーっと考えておりました。

ただ、そういった自分を支えていた考えが一つだけありました。自分が想像していたものとはかけ離れたものであっても、自分が選んだ環境ではないか、ということです。国体で優勝した自分の活躍を認められて、誘っていただいたとはいえ、自分で明治大学に進んでサッカーを行うということを決めたのだから、この4年間を全うできなければ、それ以降の社会人としての40年間など、およびもつかないのではないか、ということです。この思いに支えられて一番つらい一年生の時期を乗り越えられたのではないかと考えています。

2年生になりますと、雑務からはいっさい開放されます。トレーニングに集中することもでき、リーグ戦などにも選手として出場できるようになりました。

それほどまい選手というわけではなかったのですが、常にレギュラーということはありませんでしたが、関東リーグの一部二部入れ替えの試合に出場して、一部残留に貢献したということで、サッカー部のOBとして今後も現役に顔向けができるなと思って卒業できたのが私の現役時代です。



学生時代に、もうひとつ学んだことは、多様な価値観を受け入れることができるようになったということです。私は、鎌倉生まれの鎌倉育ちで、鎌倉を出たことがないような状況で育ちました。それが、北は北海道、南は九州から選手が集まってきた中で生活をしているわけです。自分の考え方が通用しないということは驚きでしたが、色んな人の考え方を吸収しながら自分を見失わず、自分の考えをまとめる力が身に着いたことは自分にとっての財産になったと思っています。

コーチから監督へ

卒業と同時に明治大学の職員になりました。日本サッカー協会の指導者ライセンスもとって、職員をやりながら細々とサッカーのお手伝いをしておりました。そして、93年にコーチになり、10年間コーチを行っておりました。

コーチ時代に、忘れられない出来事がありました。94年に一部リーグに昇格していたのですが、98年にはリーグの優勝争いを行うくらいチームの力はあがっていました。そして、翌年の99年には優勝の筆頭とまで世間では噂されていました。おどってしまっていたんですね。結局は一部二部の入れ替え戦で日体大に敗れて二部に降格してしまいました。負けがきまって、二部に降格が決定した瞬間の映像はいまでもくっきりと頭の中に映し出すことができます。

次に一部に復帰する時には、組織の体制ごと見直さなくてはならない。そうしなければ勝ち続けていくことはできない。そう、このとき心に強く思いました。というのは、まだ、80年代の悪しき伝統が残っていたのです。合宿所ではさすがにタバコを吸う学生はいませんでした。が、キャンパスでは吸っているところをみかけました。また、試合に向かう選手が中でタバコを吸っているタクシーが目の前を通過してゆくということもありました。負けるべくして負けた、二部に降格して当たり前だ、と思いました。私たちの言葉や思いがまったく通じていなかったことはショックでした。

2004年に監督に就任いたしました。実は、その前の2003年、韓国のテグで行われたユニバーシアードの男子代表コーチとして参加し、その大会で日本チームはイタリアを3対2で破り優勝したのです。代表コーチは2001年から2年間全うさせていただきました。監督は関西の方で、関東の選手のリサーチは全て私が任されていました。私がユニバーシアードに送り込んだ選手が優勝まで進んだことで、自分が世界に通用する選手を選ぶことができた物差しを持っていることに自信ができました。

その頃、2軍選手のためのリーグであるインデペンデンスリー

グの監督も行って、監督のつらさも経験していましたが。ただ、初年度で優勝という戦歴も残すことができましたが。

忘れもしないのですが、8月30日にユニバーシアードで優勝して、9月に明治のグラウンドに立った時に、選手たちの私を見る目が今までとは全く違うのです。ユニバーシアードで世界一をとったコーチという見方をされている、ということを感じました。選手の信頼を得ているという実感を得ました。それが2003年のことです。

2004年に大学サッカーに大きな変革が行われます。今まで8チーム14試合通年でおこなっていたシステムが変わり、2005年から12チームが一部リーグで戦うことになりました。2004年に二部から4チームがあがり、2005年には降格なしで12チームが闘うことになったのです。

その目前の2003年の14節。リーグ4位が確定した青山学院大学との試合で、とんでもない光景を目にすることになりました。その日、試合が始まる前から選手たちの雰囲気がちがっていたのです。試合中に4年生が勝手な行動を始めたのです。ベンチの指示に従わず、自分たちで勝手に試合を行い始めました。スタンドの4年生も何か軽々しく騒いでいます。そして、前半終了間際のペナルティキックで、2年生の栗橋のキックを指示したにも関わらず、4年生がボールを蹴り、そしてゴールを外しました。ピッチの中では明らかな監督への造反がまことしやかに行われている。

「あんなことでいいんですか、許すんですか、監督、いいんですか」と監督に詰め寄りましたが、試合はそのまま続いていきました。

一部に上げられないかもしれない。ビッグイヤーなのに。このチャンスを逃したら今後明治のサッカーがどうなるかわからない、そう思いました。

井澤総監督に直談判しました。「監督をやらせてください」。そうしたら、井澤総監督に、お前にやらせようと思っていた、と言われました。そして、監督をやらせるには条件があるとされました。プロのコーチをつけるよと。

自分が学生だった頃のような選手をつくらない、自分のような選手を生み出さない環境をつくりたい。明治のサッカーを良くしたいと思って入ってくる熱い思いを持った人をがっかりさせたくない。卒業してからよかったという場を作りた、そうも思いました。サッカーは勝負事ですから勝たなくてはならない。幸い世界一をとったばかりだったので、うまくまとまる兆しもありました。そして、みんなに絶対に勝つサッカーを行おうと話しました。

ビジョンの根底にあるもの

就職課に勤めていたので、優秀なリーダーのもと成功体験を沢山積んでいる組織とそうでない組織をみてきました。成功している組織には共通項がありました。リーダーが自分の言葉で自分の思いを伝えていているということです。自分はそういうことをやっていかなければならないと思いました。

そうはいつでも、実行したことはそう沢山はありません。ミーティングを週一回は行う。今までは部員全員を集めてリーグ戦の闘い方の説明などを行っていませんでした。忠誠心やロイヤリティが生まれるように、次の対戦相手のビデオを編集してみせました。また、自分たちの試合もビデオで分析しました。このチームで何をやっていくのか、そのことをよく考えさせるようにしました。

そういったこと突き詰めて行くと、結局「自分の人生に責任を持つ」ということに行きあたります。生まれる前から、そして、生まれた時には、すでに沢山の人の手を借りているわけです。大学のサッカー部に入るまでには、沢山の人もかかっている。まして、健康でサッカーができるのは色々な方々に支えていただいているからです。そのところをきちんと理解をなさないと指導してはダメです。「あなたが、明治のサッカーを選んだんだよね」「どういう風に生きてもいいけれど、どうしたら自分のためになるかなあ」ということです。そして最後にはここにいきつきます。「自分」ということです。

サッカーはやらされたら、そこで終わってしまうものだと思います。やらされていると思った瞬間それは、サッカーではなくて終わってしまうのだと。こういった方針で選手たちに話をしているの、皆、保護者の方々には感謝をしています。ワールドカップで活躍した長友選手は高校時代の井上先生からそういった教育を受けてきました。保護者の方への感謝は全ての基本になると考えています。

私自身の学生時代を振り返りますと、もっと、クラスメートと交流したかった、親しくしておきたかったという思いがあります。一般学生にとっても、体育で入ってきた学生と交流することによって学ぶ価値観というものがあるはずなんです。体育会の学生が存在する一つの意義でもあると思うのです。ですから、学生たちに、授業にでることを最優先しなさいと話しています。色々な人とかわかって、学生たちの引き出しを増やしてほしい。学生サッカーとサッカー学生とはちがう。仲間と出会い、教授と知りあう。そのことは個人の人生を豊かに、サッカーだけしか知らない人生ではなく、もっと幅の広い生き方にもつながってゆくと思っています。サッカーだけやるのなら他の環境があります。学生なのだから、授業にでるのは当たり前であるという考え方を浸透させています。

朝練、「いいディフェンスからいいオフェンスへ」、次のステージで通用する選手へ

そのために朝練を取り入れました。インデペンデンツリーグは朝練で優勝できたからです。2004年に朝6時からの練習をはじめました。2005年には、朝の6時、8時、10時の練習を行うようになりました。8時がBチーム、10時がトップチームという形をとっていたのですが、そのうち、6時の練習にもトップチームが参加するようになりました。一日2時間のトレーニングは必ず行う。そして、授業に出るというスタイルが確立されてきました。おかげさまで、1年2年3年の留年も、単位不足の呼びだしもない状態です。

ピッチ内では、戦術において勝つ、といことを念頭に置いています。「いいディフェンスからいいオフェンスへ」ということを現在は提唱しています。サッカーは、極端に点が入らないスポーツです。色々考えたのですが、間違いないと思ったのは、失点されたら立ち直れない、ということです。そして、0対0で終わったら、勝ち点がつく。つまりは、失点をしないういディフェンスを行うということを考えました。プレッシャーをかけられるのは、動いているときだけです。ゆえに守備はつねに足を動かしてはならない。そして、リズムをつくる。相手に自分たちのリズムで動かさせて、ボールを奪い、自分たちのリズムで攻撃、オフェンスにでてゆく、ということです。そして、その間も、失点をしないういことに神経をつかう。その結果、現在は13試合で6失点です。攻守のバランスがとれているチームになっていると言えます。

さらに、明治のスタイルのサッカーの確立ということに発展します。それは、「選手の判断で攻撃ができる」ようになる、ということです。つまりは、次のステージで通用する選手になる、ということになります。きちんとボールを扱うことができ、きちんとしたセオリーがあって、きちんと考えて攻撃できる、このことができれば、次のステージで活躍することが可能はずなんです。そのところができていけば、他のことはほっておいてもいいのではないかと考えています。スポイルするような声はかけません。良ければ誉める。悪かったところは自分で一番よくわかっているはずですから。

優勝を重ねてゆきたいです。51大会ぶり、昭和33年以来のインカレの優勝を果たしましたが、一回だけだと、まぐれだといわれてしまいます。2007年は長友がいたから勝てたというような言われかたをされてしまいます。2回以上の結果を出せば本当の力があると認められるでしょう。残り9試合をぶっちぎりで優勝を目指したいです。そして、どんな大会でも2回ずつ優勝をしてゆきたいです。

これからのこと

サッカー部を卒業した選手の進路は、Jリーグ、JFL、一般企業、公務員と様々な方面にわたっていますが、さらに、多種多様な進路選択を考えてくれる部員に育ててほしいと思っています。起業するもの、大学院に進学するもの、海外に活躍の場を見出すもの。「おまえそんなところまで考えていたのか」というこちらが思いもつかなかったような道を選んでくれるような学生を育ててゆきたいです。そのためには、学生たちがいろんな人と出会う場所を作ってゆきたいとも考えています。「知的野蛮人」と自分で名前をつけているのですが、そういった人材を一人でも多く輩出できるように頑張りたいと思っています。本日はご清聴ありがとうございました。

休刊のお知らせ
長く御愛読いただきました、全国紫明クラブ会報も、今号をもちまして休刊させていただきます。例会での講演内容がいずれも素晴らしく、このことを例会にいらしゃれない会友の方々にぜひお伝えしたい、ということが毎回の編集の際に私を支える思いでありました。また、全国紫明クラブでしか知り得ることのできない知恵や知識を共有することは、物質的にも精神的な意味においても我々の生活を豊かに価値高いものにし、ひいては社会の成長への貢献の一助になるものであると捉えておりました。この会報を発行することは、全国紫明クラブの会としての大きな役割の一つであり、会友への贈り物であり、日本全国に散らばる会友の帰属意識、会友同志を強く結びつける絆であったのではないのでしょうか。



(9月17日 紫紺館に於いて)

休刊の号として、我々同窓の誇りである作詞家の阿木耀子さん、また、母校明治大学から心身ともに健全で有益な人材を輩出されようと、サッカーを通して後輩諸君を育ててくださっているサッカー部監督、神川明彦さんの講演を御紹介できたことは、大変光栄かつ名誉なことであり、よい記念となりました。今後、この会報の役割はウェブサイトに引き継がれるということですが、全国紫明クラブの財産である講演の内容が有効に活用されることを祈ってやみません。途中中断した時期もありましたが、2004年から6年あまり御愛読いただきましたこと、心より感謝いたします。ありがとうございます。

有限会社 グローバルワークス 代表取締役 小田 俊明